

令和3年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団	
施 設 名	ロームシアター京都（京都会館）	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内 定 額 (総 額)	28,431	(千円)
	公 演 事 業	17,444 (千円)
	人 材 養 成 事 業	4,233 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	6,754 (千円)

(1) 令和3年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	ピチエ・クランチェン・ダンスカンパニー 「No. 60」	2022年3月26日 他※	演出・振付・出演：ピチエ・クランチェン、出演：コーンカーン・ルーンサワーン	目標値	620名
		サウスホール		実績値	260名※
2	ディミトリス・パパイオ アヌー新作公演	2021年4月30日 他※	新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、アーティストの来日が困難となり中止。	目標値	1,200名
		サウスホール		実績値	—※
3	Sound Around 001	2021年7月17日 他	出演（ホスト）：いまいけぷろじえくと 今村俊博、池田萌 他	目標値	220名
		ノースホール		実績値	148名
4	メレディス・モンク&ヴォーカル・アンサンブル with バング・オン・ア・カン 「MEMORY GAME」	2021年11月28日※	新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、アーティストの来日が難しくなり中止。	目標値	550名
		サウスホール		実績値	—※
5	ウィリアム・フォーサイス 「Three Quiet Duets」	2022年2月9日※	新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、アーティストの来日が困難となり中止。	目標値	1,130名
		メインホール		実績値	—※

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(2) 令和3年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	劇場の学校プロジェクト	2021年7月27日 他	講師：岡田利規、木田真理子、山城大督 他	目標値	310名
		ノースホール 他		実績値	236名
2	リサーチプログラム	2021年7月7日 他	リサーチャー：小山文加、古橋果林、新里直之、吉田 杏 メンター：吉岡洋、若林朋子	目標値	105名
		会議室 他		実績値	4名※

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和3年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	伝統芸能入門講座～芸能の在る処～	2021年7月29日 他	メイン講師(案内人): 木ノ下裕一 ゲスト講師: 岡田利規、桐竹勘十郎 他	目標値	120名
		ノースホール 他		実績値	372名
2	プレイ!シアター in Summer	2021年8月14,15日	出演: 京都市交響楽団 他	目標値	12,000名
		メインホール 他		実績値	5,598名 ※
3	シアターデビュー促進プログラム ロームシアター京都×京都市文化会館5館連携事業	2021年10月8日 他	出演: to R mansion、BEBERICA theatre company	目標値	325名
		京都市呉竹文化センター 他		実績値	106名 ※
4	アセンブリープログラム ホリデー・パフォーマンス	2021年6月27日 他	出演: 低音デュオ、山崎阿弥、篠田 栞、佐久間新	目標値	200名
		3階共通ロビー		実績値	165名 ※

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。
<p>当劇場は、文化芸術の継承・創造・発信拠点として、京都における文化芸術のインフラ構築のためのハブ機能を果たしていくとともに、「劇場のある空間」を中心として、人々の暮らしの感覚と芸術とが相互に繋がることで、京都に「劇場文化」をつくり、根づかせることを社会的役割（ミッション）としている。このミッション実現のために、「世界水準において質の高い作品鑑賞の機会を定期的に提供すること」、「次世代の人材を発掘し育てること」、「生活と芸術の接点となる事業を展開すること」が重要だと考えている。本助成対象事業は、まさにこの根幹をなし、ミッションを体現するものである。特に、現在の京都において、一定規模以上の現代的なプログラムを上演できる劇場は限られており、広域的に西日本地域にとっても貴重な場となっている。人材養成事業については、研究・批評と実践の場をつなぐ専門の人材を対象としたものに加えて、13歳～18歳の若年層を対象とした事業に力を入れている。また、舞台芸術の入り口となるホール外でのプログラムや講座を開催し、地域の人々と劇場の新しい接続を試みている。公演事業、人材養成事業、普及啓発事業のバランスが図られ、ミッション実現に向けての事業構成は適切で、年を経るごとに整ってきている。</p> <p>新型コロナウイルス流行に伴う政府の水際措置強化により、公演事業5演目のうち3演目（いずれも海外招聘作品）が中止となった。なんとか延期の末に来日を果たした公演についても、実施可否の確定が遅れ、広報に十分な時間を割くことができなかった。人材養成事業、普及啓発事業においても、入場制限や参加者を絞って実施せざるを得ず、目標値に達しなかった事業が多数となった。これらの点に関しては予定通りに進められたと言えないが、本年度は致し方なかったと自己評価している。次年度以降、コロナ禍前の目標値に近づけることを目指す。一方、動画配信をはじめとしたオンラインを活用することで、新たな観客層へのリーチに挑戦できた。</p>
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。
<p>●文化的意義</p> <p>地域において、中規模以上の作品鑑賞機会を期待する声が多い。（インターネットアンケート調査報告書より）今後も継続して、一定規模以上の質の高い舞台作品を定期的に上演することが地域のニーズに応え、人々の鑑賞機会及び文化芸術活動の拡大については人材育成に資すると考えている。中止せざるを得なかったが、特徴的なラインアップを組み、関心を喚起している。また、人材養成事業「リサーチプログラム」においては、その成果となる報告会や「紀要」と称している報告書は一般公開している。全国の公共劇場スタッフにとって、重要なリソースとして活用できるものを発表している。</p> <p>●社会的意義</p> <p>海外アーティストの招聘により、舞台芸術に限らず、コロナ禍で途絶えている人々と世界の出会い、国際交流の場を生み出すことができた。そして、人材養成事業「劇場の学校プロジェクト」では、中高生が舞台芸術を体験するということに留まらず、表現活動において必要な想像力、他者との対話、身体への意識が、これからの社会を生き抜く術であると考え、参加者とともに劇場での学びの場をつくっている。参加者アンケートにおいても高い数値の結果が得られている。普及啓発事業「シアターデビュー促進プログラム」においては、外出する機会が減り、孤立しがちな子育て世代の交流を促した。</p> <p>●経済的意義</p> <p>これまで京都になかった規模の劇場が稼働することにより、地域の舞台芸術関係者の雇用を生み出し、活性化を促している。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

●【公演事業】目標は以下の5項目とした。

①観客の満足度が85%以上を維持する。②舞台芸術の関心の向上、再訪の希望者が85%を維持する。③全体で、有料の入場者数を設定席数の78%以上まで増加させる。④海外演目の25歳以下の観客を全体の16%まで向上させ、18歳以下の観客は各公演10人以上の購入者を目指す。⑤ロームシアター京都のプログラムだから見に来たという観客を10%まで増加させる。

①は、「ピチュ・クランチェン ダンスカンパニー」公演(事業1)は90%で目標値以上の数値となったが、「Sound Around 001」(事業3)については63%で下回った。実験的な公演であったため、賛否が分かれたと思われる。

②は、ともに100%と高い数値となったが、③④については目標値に達せず、集客については大きな課題が残った。③は、事業1は招待者を含めても33%、事業3は74%にとどまった。④については、事業1の25歳以下チケットは14枚。18歳以下は2枚にとどまった。⑤は、ともに目標値を超えた。事業1は25%、事業3は12%。リニューアルオープン以来の我々のプログラムに対する理解が広がり、継続実施の成果が出ている。

●【人材養成事業】目標は、対象が大きく異なるため、事業別に設定した。

「劇場の学校プロジェクト」①受講者の事業に対する満足度を4.95ポイントまで増加させる。②参加後の受講者の舞台芸術に対する関心度を4.75ポイントまで増加させる。③参加後の受講者の将来展望の向上度を4.55ポイントまで増加させる。④応募者数80名以上を目指す。舞踊コースでは舞台出演が未経験の参加者が15パーセントを目指す。

①～③はわずかに目標値に達しなかったが、大変高い数値を得た。特に、令和3年度より講師及び内容をリニューアルしたメディア表現コースにおいては全参加者から満点である5ポイントの満足度を得た。①平均ポイントは、4.83/5点満点。(舞踊4.86、演劇4.67、メディア表現5)②平均ポイントは、4.72/5点満点。(舞踊4.67、演劇4.61、メディア表現4.89)③平均ポイントは、4.43/5点満点。(舞踊4.48、演劇4.39、メディア表現4.42)④は、応募者数については、92名舞踊コースでは未経験の参加者が19パーセントで目標値を上回った。昨年度と比べ、コロナ禍での活動についての対策、保護者の理解が進んだ結果が大きい。継続して実施したことで広報が行き届き、定着してきたと考える。舞踊コースにおいても未経験者の数値があがり、多様な参加者への広がりが生まれてきている。

「リサーチプログラム」⑤応募者数18名以上を目指す。⑥最終報告会の参加数50名以上を目指した。⑤については6名で目標に達していないが、こちらが対象とする人材が定員以上はコンスタントに集まっている。継続実施の成果が出ている。⑥については、参加者は目標に達していないが、映像配信を行い、現地まで来れない人たちにもこのプログラム、そしてここでの知見を共有できた。

●【普及啓発事業】目標は以下の5項目とした。

①受講者・観客の満足度が85%以上を維持する。②舞台芸術の関心の向上、再訪の希望者が85%を維持する。③定員及び設定客席数の90%以上の来場を達成させる。④若い年代(10代、20代)の参加が40パーセント以上あること。⑤来場者数が10,000人以上あること。⑥映像ライブ配信のアクセス数が10,000件以上あること。

①②は、全体として達成することができた。毎回、普及啓発事業のアンケート調査では高めの数値が出ることも多いが、なかでも乳幼児向けの作品上演は100%満足と大変充実した結果となった。③は、会場変更もあり判断するのが難しくなってしまったが、入場者数は概ね想定以上となった。④は、課題が残る。若年層の集客についての要因を明確にし、その対策を引き続き検討する。⑤は一部人数制限をおこなったため、数値に達しなかった。が、安心安全な環境を優先した。⑥は前年度より落ちた。配信が増えているが、リアルへの希求かもしれない。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

●【公演事業】

・ピチェ・クランチェン・ダンスカンパニー 「No. 60」

計画：2021年12月3日（金）19:00、12月4日（土）14:00⇒実施：2022年3月26日（土）、27日（日）

政府による水際措置強化のため、実施時期を延期した。効率性においては課題があるかもしれないが、当劇場において約15か月ぶりとなる海外アーティストの作品招聘実現という目標を優先した。

・Sound Around 001

適切な事業期間で、当初の予定通り事業を実施した。

●【人材養成事業】

・劇場の学校プロジェクト

適切な事業期間で、当初の予定通り事業を実施した。

・リサーチプログラム 計画に沿った期間で実施。

適切な事業期間で、当初の予定通り事業を実施した。交付申請段階では、最終報告会の日程が決まっていなかったが、リサーチャー確定後、各自の予定を調整して、しかるべき段階で決定した。

●【普及啓発事業】

コロナ禍にあって講師やアーティストのスケジュールが流動的で、実施日を決定するのが遅れたが、しかるべき段階で決定した。適切な期間での事業実施を行うことができた。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

●【公演事業】

・ピチェ・クランチェン・ダンスカンパニー 「No. 60」

隔離を必要とするスタッフ、出演者もいたため、予定していなかった経費が発生した。政府による水際措置緩和後の早い段階での招聘だったため、複雑な手続きが必要でそれに伴う経費も増大した。今後は、入場料収入の割合をあげていく必要がある。広報や営業手段など改善していく余地は大いにあるが、効率性や経済性の指標で図りきれない部分で優先するものもあると考えており、全体の事業でバランスを図っていきたい。

・Sound Around 001

適切な事業費で、当初の予定通り事業を実施した。

●【人材養成事業】及び●【普及啓発事業】

6事業とも、適切な事業費で、当初の予定通り事業を実施した。感染予防対策のため、参加者数を絞った事業もあり、事業の対象者数で考えると一人当たりの経費は効率的ではないと映るかもしれない。しかし、当劇場では、一般的な費用対効果の考え方より長期的なスパンで効果測定をすべきだと考えている。このことに関して、社会的コンセンサスをとる努力を引き続き行っていく。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当劇場は、公共劇場やフェスティバルでの従事経験のある専門の人材を開館準備から擁してきた。さらに、他劇場・フェスティバルの芸術監督やスタッフ、アーティストと将来的な展開について意見を交わすことで劇場間交流が促進され、我々の技術・制作スタッフにとって、様々なノウハウを蓄積することができている。感染症対策や海外アーティストの招聘業務にあたって、他地域の公共劇場とのネットワークが活かされた。

●【公演事業】

- ・ピチュ・クランチェン・ダンスカンパニー 「No. 60」

水際措置緩和後の早い段階での実施で、全国的に見ても令和3年度の貴重な海外アーティストによる公演となり、久々の機会を楽しむ観客の様子が見られた。国際交流機関の協力を得て、京都で学ぶ海外留学生に声をかけて足を運んでもらった。英語字幕をつけたこともあり、作品理解が進み、アフタートークでも積極的な意見を引き出すことができた。

- ・Sound Around 001

本公演初演作品の作曲をはじめ、音楽以外のジャンルで活躍するゲストと創造活動を行う等、今までにない挑戦的な公演として実施することができた。

●【人材養成事業】

- ・劇場の学校プロジェクト

演劇、ダンスに加えて、メディア表現コースを設けているところが本事業の特徴であるが、コースの名称を「メディア・パフォーマンス」から「メディア表現」に変更しその内容を明確にするだけでなく、メディアそのものについて考える機会を設け、内容が格段に深まった。ジャンル越境的な公演事業を実施していることとも繋がる成果を出している。

- ・リサーチプログラム

舞台芸術の研究者を学術の場から実践の場である劇場に招き入れ、研究と実践が互いに影響を与え合う回路をつくり、舞台芸術、特に劇場という機能の拡張を試みている。過去の参加者が、ここでのリサーチを基にした論考で第65回群像新人評論賞の当選作に選ばれるなど着実な成果が出ている。

●【普及啓発事業】

- ・伝統芸能入門講座

「劇場文化をつくる」ことを理念とするロームシアター京都ならではの講座となった。平均して90名以上を集客する人気の講座となり、また各回講座内容をレポートにまとめており、関西の伝統芸能と劇場のあり方を考察する契機として機能している。

- ・プレイ！シアターin Summer

ワークショップや展示企画では京都の大学と連携し学生にスタッフとして参加してもらったり、夜間開園中の京都市動物園での出張企画を初めて行うなど、地域の連携にも寄与することができた。

- ・シアターデビュー促進プログラム

コロナ禍で乳幼児との外出を控えていた親たちにとって、普段とは異なる我が子の新たな一面を発見する機会にもなり、有意義な時間となった。アンケートでは回答者全員が「とてもよかった」「よかった」とし、また、鑑賞後はリラックスした雰囲気の中来場者同志の新たな交流が生まれるきっかけとなった。

- ・アセンブリープログラム ホリデーパフォーマンス

館内施設を利用する人たちが、ふらりと立ち寄り観賞する姿が多く見られ、建物と立地の機能を拡張できた。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

●【公演事業】

・ピチェ・クランチェン・ダンスカンパニー 「No. 60」

広報のために集めた推薦コメントも熱い思いが溢れたものだった。

「このプロジェクトは、タイ古典舞踊という、長い間「秘伝」「奥義」として神秘化＝権威化されてきた（それゆえ一つの「権力」として機能する）「言語」体系を、徹底的に分析し、新たな統辞法の可能性を提示する。それは、新たな、別の使用法（汎用であり、流用・誤用可能な）へと開かれ、来るべき革命（ダンスの／社会の）のための書物＝武器となるだろう。ていうか、コレ、超グルーヴィだから!! 桜井圭介（音楽家・ダンス批評家）」

「(略) ピチェの舞踊言語であるタイ古典舞踊の型を突き詰めて突き詰めて、新たな境地の結晶にまで達した本作の透度と透徹さは驚くべきものです。あらゆる観客、表現者がこの機会を逃さず、驚くべき時間を共にすることを願います。KYOTO EXPERIMENT 共同ディレクター 川崎陽子、塚原悠也、ジュリエット・ナップ」

ツイッターをはじめとする SNS やアンケートにおいては、徐々に海外作品を見た興奮と振付家の舞踊に対する真摯な態度とその能力、そして社会に対するアクションに賞賛を投げかけるものが多かった。コロナ禍において、心身ともに内向きになりがちな日々には風穴を明け、地域の文化芸術関係者、観客に刺激を与える公演となった。

・ Sound Around 001

新しい音楽との出会いをコンセプトにする企画意図どおり、多様なアプローチの方法や新たな発見に驚きを感じた観客アンケートや公演評が集まった。次回のアーティストを期待する声もあり、今後、継続していくことで新鋭アーティストやその観客層を開拓できる手ごたえを感じた。

—公演評より抜粋—（ロームシアター京都 WEB マガジン掲載）

「作曲家や演出家やダンサー・振付師の作品、そして多様なフィールドで活躍するゲストと共に、芸術の長い歴史のなかで既に多くが語られてきた、生の根幹に関わるテーマに対して、まだまだ多様なアプローチが可能であることを文字通り「身」をもって示してくれた。（原 壘）」

「だが演奏会が終わりに近づくにつれ、私はいつものように音楽を楽しんでいることに気づくようになり、自分の中に新しい価値観が生まれつつあることに喜びを感じていたのであった。（足利大輔）」

●【人材養成事業】

・劇場の学校プロジェクト

劇場の学校2021報告書によると、昨年度と比較して、「新たな気づきや発見があった」「舞台芸術への興味・関心が高まった」のポイントが上昇している。劇場でやるからこそその学びの場が生成されていると手ごたえを感じている。

・リサーチプログラム

劇場における研究・調査と実践をつなぐ本事業は、国内においては類似事業がほぼなく、当劇場の特色を打ち出したものになっている。

●【普及啓発事業】

継続事業は情報公開前から問い合わせが入るなど、それぞれ定着してきた実感がある。なかでも、・プレイ！シアター in Summer は子どもたちの夏休みの恒例行事として、カレンダーに示される催しとなっている。新規事業となった・伝統芸能入門講座は、申込者が多く、急遽大きな会場に変更するなど順調な滑り出しとなっており、次年度以降も継続することで、地域の文化芸術の発展に寄与していきたいと考えている。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

ロームシアター京都を運営する、公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団は、「中期経営計画 2025」（令和4年3月発行）を策定し、2022年度から2025年度までの4年間の方針を定めている。京都市の文化芸術のインフラの経営を総合的かつ安定的に展開し、経営基盤を強化するため、組織運営に関して「職員一人一人の更なる活躍による組織の自立性と活力の向上」「組織人員体制・配置等の最適化」「リスクマネジメントの推進」の3つの方針を推進している。財務運営に関しては、「当財団全体の財務管理の強化」「ファンドレイジングの推進」「ICT環境整備による財務の合理化の推進」を重点取組としている。

PDCAの流れは、理事会を中期経営計画及び年度事業計画の承認・評価の最高機関として、計画の進捗確認・年度評価及び事業計画の作成・進捗確認・年度総括、各事業の実績報告・事業評価は各部門の責任者で構成する月例会を行っている。

この計画の各部門の方針のもと、設置者である京都市からの指定管理料、各所からの助成金、協賛金、寄付会員からの支援を得、持続的に発展することができる組織運営を行っている。

また、公益社団法人全国公立文化施設協会や公共劇場舞台技術者連絡会、劇場、音楽堂等連絡協議会（劇音協）への参画、各事業を通じた取組により、他地域の劇場・音楽堂や教育機関等関連団体との関係が強化されている。地元アーティストや近隣文化施設と共に地域活性に資する事業を行うと同時に、海外招聘公演を積極的に行い、そのネットワークはローカルにも、グローバルにも広がっている。最近では、国内の公共劇場との協働が多く、ネットワークが強化された。このネットワークにより、新型コロナウイルス感染予防対応についても、情報交換をスムーズに行え、大いに活用できた。

平成4年3月には、ロームシアター京都において、「ハラスメント防止ガイドライン ～ロームシアター京都に集う全ての人のために～」を策定した。策定にあたっては、複数の舞台芸術関係者からヒアリングを行い、案を取りまとめて、令和3年2月にシンポジウム「劇場におけるハラスメントを考える（個人が尊重され、豊かな対話が生まれるために）」において公表し、広く意見を募集したところ、多くの方が関心を寄せくださった。その後、文化芸術団体、弁護士、ハラスメント対策の専門家にもご意見をいただき、それらを踏まえ検討を重ね、京都市の確認を経て、ガイドラインとして取りまとめた。職員向けのガイドライン「公益財団法人 京都市音楽芸術文化振興財団ハラスメント防止に関する指針」（令和2年8月1日策定）と合わせて運用し、今後ロームシアター京都が身体的・精神的に安心安全な劇場であり、「憩いの場」として機能していくため、職員研修といった館独自の学びの場を設けるだけでなく、京都の創作・上演環境の向上を目指す人々とも共に考える場を催すなど、ハラスメントの起こらない環境づくりに努めていく。

当財団が実施したインターネット調査の結果では、対象者の78.4%が「京都にロームシアター京都があることに対して、愛着あるいは誇りがある」と答えている。（令和3年3月実施調査）他の比較データがないため、分析が難しいところはあるが、我々としては、高い期待と注目を感じている。開館5周年を経たが、地域のニーズをまだはっきりと掴めていないことをひとつの課題として認識しており、今後、人々との関わりを増やしていくことにより、地域に必要な劇場の役割を担っていく。